

第 68 回北摂小児科医会プログラム

日時：平成 22 年 9 月 11 日（土）15 時

場所：西宮市立中央病院 3 階 講義室

話題提供（15：00～15：15）

「抗インフルエンザ薬に関する話題」 中外製薬株式会社 大阪支店学術室 早川一俊

一般演題（15：15～16：00）

座長 中島 良一先生（西宮市立中央病院 小児科）

1) 「虐待による心因反応が疑われていた急性辺縁系脳炎の 1 例」

大阪府済生会千里病院 小児科 橋本和磨、大西さやか、森本恭子、瀬戸真澄

大阪市立大学医学部附属病院 小児科 前田夏野子、佐久間悟、横井俊明

症例は 6 歳女児。母に頬をたたかれた後、短時間の意識障害あり他院に救急搬送入院となる。虐待を疑われ、翌日より数日間、児童保護施設に保護。自宅に帰宅後、食欲低下、異常行動がみられ児童相談所で虐待による心因反応が疑われていた。帰宅 4 日後さらに興奮がひどく食事が取れないため急病センター受診。翌日、児童相談所に相談に行く予定であったが、当院を受診。脳炎疑いで入院となる。入院後、脳波で右優位の高振幅徐波、髄液検査で軽度の細胞数上昇みられ急性辺縁系脳炎と診断された。近年、虐待の増加が見られるが器質的疾患についても念頭に置いた鑑別が大切である。

2) 「当科における過去 4 年間の急性脳症・脳炎の検討」

兵庫県立塚口病院 1) 小児科 2) 小児集中治療科 3) 小児外科

河勝千鶴¹⁾、大森翔子¹⁾、大場彦明¹⁾、趙有季¹⁾、大西聡¹⁾、竹下扶生子¹⁾、竹下佳弘^{1)、2)}、
高原賢守^{1)、2)}、横尾憲孝¹⁾、木村祐次郎¹⁾、飯尾潤¹⁾、前田真治¹⁾、松本貴子¹⁾、
毎原敏郎¹⁾、野中路子¹⁾、芥川宏¹⁾、平尾敬男¹⁾、岩間英明³⁾、中條悟^{2)、3)}、片山哲夫³⁾

当科で平成 19 年 4 月から平成 22 年 7 月の間に、急性脳症・脳炎と診断して加療した 14 例について後方視的に検討する。内訳は急性脳症 9 例（インフルエンザ脳症、急性壊死性脳症、hemorrhagic shock and encephalopathy、けいれん重積型急性脳症、けいれん群発型 HHV6 脳症、ロタウイルス脳症各 1 例、その他 3 例）、急性脳炎 5 例（エンテロウイルス髄膜脳炎 3 例、ヘルペス脳炎 1 例、ムンプス脳炎 1 例）であった。脳低体温療法を施行したのは、急性脳症・脳炎と診断した 14 例のうち 7 例であった。急性脳症・脳炎はしばしば重症化して集中治療を要するが、エビデンスの確立した治療法は少ない。当科では脳低体温療法を含めた集中治療を施行しており、その安全性と有効性について検討した。

----- コーヒータイム（16：00～16：10） -----

総会（16：10～16：20）

ミニシンポジウム 「新型インフルエンザH1N1の再来に備える」(16:20~18:00)

座長 山本 威久先生(箕面市立病院 小児科)

「オーバービュー：新型インフルエンザの現状」(3分)

箕面市立病院 小児科 山本威久先生

1、「新型インフルエンザ肺炎に対する喘息、抗生剤治療」(20分)

兵庫県立塚口病院 小児科 芥川宏先生

昨年度の当科における新型インフルエンザ入院患者 98 名中、喘息 24 名、肺炎 28 名(重複 7 名)に認めた。治療として抗ウイルス薬はほぼ全例、ステロイド薬は喘息 17/24 名(71%)、肺炎 2/21 名(10%)、抗生剤投与は喘息 17/24 名(71%)、肺炎 20/21 名(95%)、人工呼吸管理を 3 名に行った。新型インフルエンザによる肺炎、喘息に対する抗生剤、ステロイド投与について文献的考察を含めて報告する。

2、「迅速キットによる新型インフルエンザ感染者の登園・登校基準の検討」(15分)

山上小児科クリニック 山上文良先生

新型インフルエンザ流行時に、季節性インフルエンザとは異なる登園・登校基準が種々出された為、保護者とのトラブルが生じた。感染性の有無を裏付ける調査データが非常に少ないことが登園・登校基準を混乱させた原因の一つである。迅速キットにて陽性が確認された症例で、解熱後 3 日或いは発症 7 日後迅速キットを再チェックしたので報告する。

3、「新型インフルエンザ治療」(30分)

1) 抗インフルエンザ薬(15分)

箕面市立病院 小児科 山本威久先生

CDC、WHO は“新型インフルエンザH1N1、2009 は重症化する”との注意喚起をおこなったが、日本での新型インフルエンザ肺炎での入院率・死亡率は世界水準と比較して低かった。今回、入院前に外来でなされた抗インフルエンザ薬治療が入院後の臨床症状、臨床検査値、入院期間に及ぼす影響について検討した。【対象】基礎疾患がなく、呼吸器管理を要さなかった新型インフルエンザ肺炎、気管支炎の小児入院患者 71 名。【方法】年齢、入院後の抗インフルエンザ薬治療期間、ステロイド治療の有無、初発症状発症からの入院時病日で補正した重回帰分析。【結果】外来での抗インフルエンザ薬治療は、入院後の呼吸数正常化に要する時間及び入院期間を有意に短縮した。【考察】抗インフルエンザ薬の早期投与は新型インフルエンザ肺炎、気管支炎による入院後臨床経過を改善すると考えられた。

2) 漢方薬(麻黄湯)(15分)

箕面市立病院 小児科 山本勝輔先生

平成 21 年 8 月から 11 月に当科外来でインフルエンザ感染と診断し麻黄湯を投与した 329 名にアンケートを郵送した。回答は 167 通、男性 103 名、女性 64 名。年齢は 1 歳 4 カ月から 16 歳 9 カ月(中央値 8 歳 6 カ月)。麻黄湯単独群は 57 名、抗ウイルス剤併用群は 110 名であり、発熱期間はそれぞれ 1.4 ± 1.0 日、 1.5 ± 1.2 日であった。発熱期間、関節痛・頭痛、異常行動、副作用発現のいずれにおいても両群間で有意差を認めなかった。麻黄湯投与の安全性は確認されたが、併用投与の有効性は認められなかった。

※ なお、当日参加費 1,000 円を徴収させていただきます。

※ 当医会は、生涯教育システム登録研修として認定されております。

単位(3)、カリキュラムコード No, (1・13・28・45・46・79)

共催 北摂小児科医会／中外製薬株式会社